

神奈川県資源管理指針 改正新旧対照表

改正後		現 行	
神奈川県資源管理指針		神奈川県資源管理指針	
平成23年3月30日策定 平成24年2月13日改正 平成28年6月29日改正 平成30年6月22日改正 令和2年6月18日改正		平成23年3月30日策定 平成24年2月13日改正 平成28年6月29日改正 平成30年6月22日改正	
目 次		目 次	
	頁		頁
第1 神奈川県海洋生物の保存及び管理に関する基本的な考え方		第1 神奈川県海洋生物の保存及び管理に関する基本的な考え方	
1 神奈川県の漁業概観	1	1 神奈川県の漁業概観	1
2 神奈川県の資源管理実態	2	2 神奈川県の資源管理実態	2
3 資源管理の方向性	4	3 資源管理の方向性	4
第2 海洋生物資源等毎の動向及び管理の方向		第2 海洋生物資源等毎の動向及び管理の方向	
【魚種別資源管理】		【魚種別資源管理】	
1 サバ類	5	1 サバ類	5
2 キンメダイ	7	2 キンメダイ	7
3 ヒラメ	9	3 ヒラメ	9
4 マダイ	10	4 マダイ	10
5 マコガレイ	12	5 マコガレイ	12
6 アナゴ	14	6 アナゴ	14
7 シラス	15	7 シラス	15
8 アワビ	16	8 アワビ	16
9 スルメイカ	17	9 スルメイカ	17
10 シャコ	18	10 シャコ	18
11 ナマコ	19	11 ナマコ	19
12 イセエビ	21	12 イセエビ	20
13 マダコ	22	13 マダコ	21
14 トラフグ	23	14 トラフグ	22
15 イワシ類	25	15 イワシ類	24

16 クロマグロ	27
17 タチウオ	28
【漁業種類別資源管理】	
1 定置網漁業	30
2 小型機船底びき網漁業	32
3 小型まき網漁業	33
第3 その他	
(1) 資源管理計画の履行確認	34
(2) 履行確認手段	34
(3) 評価検証作業	34
(4) その他	35
第1 神奈川県海洋生物の保存及び管理に関する基本的な考え方	
1 神奈川県漁業概観	
<p>2004-2015年の漁業生産量は4万トンから5万トン前後で推移してきたが、2016年には3万トン程度まで落ち込んだ。1999年から2016年の18年間で最も生産量が多かった年は2000年の8万トンで、最も少なかった年は2016年の2万9千トンであった。生産量の内訳をみると、遠洋漁業が全体の40%から50%を、沖合漁業は5%から10%前後を占めている。沿岸漁業では2005年までにその割合を全体の約40%にまで占めるようになり、2006年以降は45%から50%の間で推移している(図1)。</p> <p>漁業実態として、遠洋漁業の中では遠洋まぐろ延縄漁業及び遠洋かつお・まぐろまき網が生産量の大半を占めている。沖合漁業はさばたもすくい漁業、キンメダイ漁業などが中心である。沿岸漁業は、定置網漁業の生産量が大半で中型まき網、小型まき網がこれに続いている。</p> <p>県全体での漁獲魚種の傾向をみると、マグロ類、カツオ類、サバ類、イワシ類、イカ類の漁獲量が多い。ただし、マグロ類、カツオ類は遠洋で漁獲されているものが大半であり、神奈川県の相模湾沿岸ではサバ類、アジ類、イワシ類が、東京湾沿岸ではスズキ、アナゴなどが多く漁獲されている(図2)。</p>	

16 クロマグロ	26
(新規)	
【漁業種類別資源管理】	
1 定置網漁業	28
2 小型機船底びき網漁業	30
3 小型まき網漁業	31
第3 その他	
(1) 資源管理計画の履行確認	32
(2) 履行確認手段	32
(新規)	
(3) その他	32
第1 神奈川県海洋生物の保存及び管理に関する基本的な考え方	
1 神奈川県漁業概観	
<p>2004-2015年の漁業生産量は4万トンから5万トン前後で推移している。1999年から2015年の17年間で最も生産量が多かった年は2000年の8万千トンで、最も少なかった年は2014年の3万2千トンであった。生産量の内訳をみると、遠洋漁業が全体の40%から50%を、沖合漁業は10%前後を占めている。沿岸漁業では2005年までにその割合を全体の約40%にまで占めるようになり、2006年以降は45%から50%の間で推移している(図1)。</p> <p>漁業実態として、遠洋漁業の中では遠洋まぐろ延縄漁業及び遠洋かつお・まぐろまき網が生産量の大半を占めている。沖合漁業はさばたもすくい漁業、キンメダイ漁業などが中心である。沿岸漁業は、定置網漁業の生産量が大半で中型まき網、小型まき網がこれに続いている。</p> <p>県全体での漁獲魚種の傾向をみると、マグロ類、カツオ類、サバ類、イワシ類、イカ類の漁獲量が多い。ただし、マグロ類、カツオ類は遠洋で漁獲されているものが大半であり、神奈川県の相模湾沿岸ではサバ類、アジ類、イワシ類が、東京湾沿岸ではスズキ、アナゴなどが多く漁獲されている(図2)。</p>	

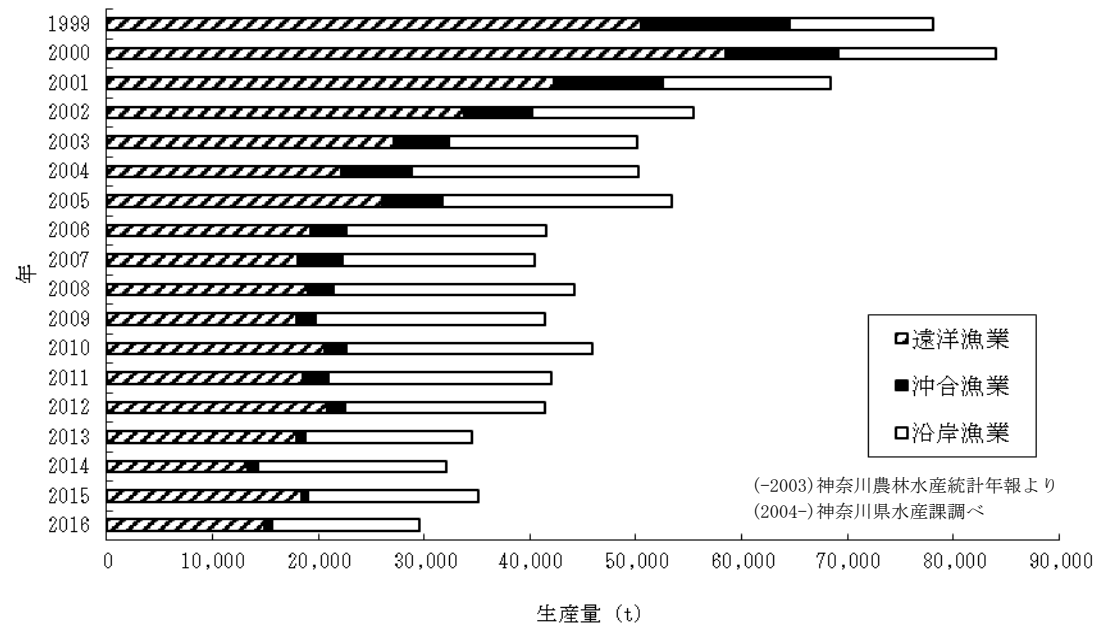


図1：神奈川県の水産生産量の推移（1999～2016）

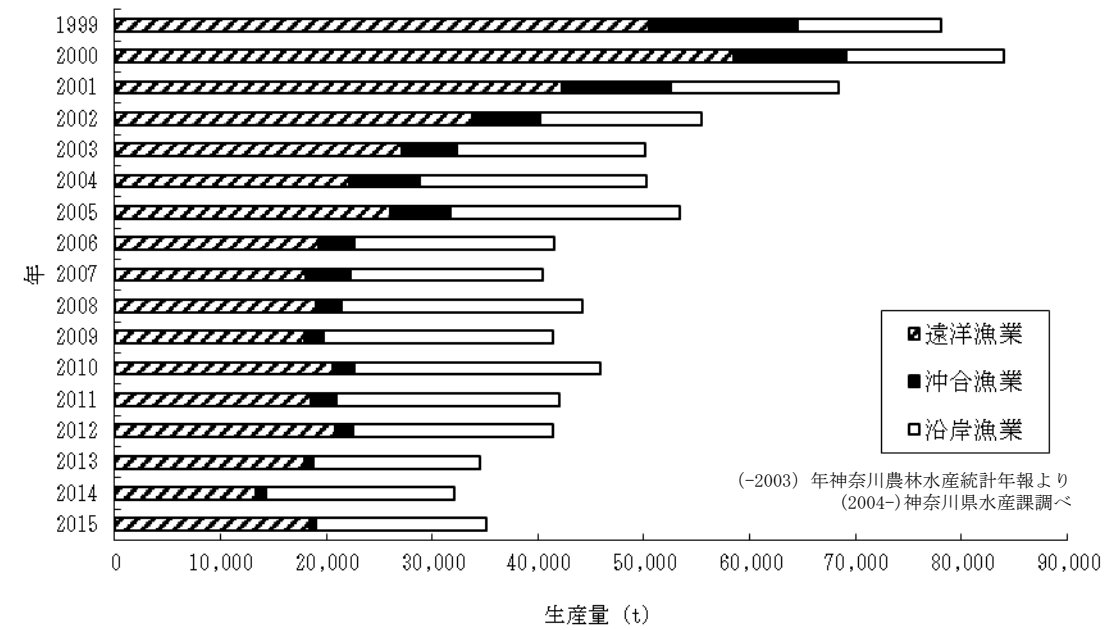


図1：神奈川県の水産生産量の推移（1999～2015）

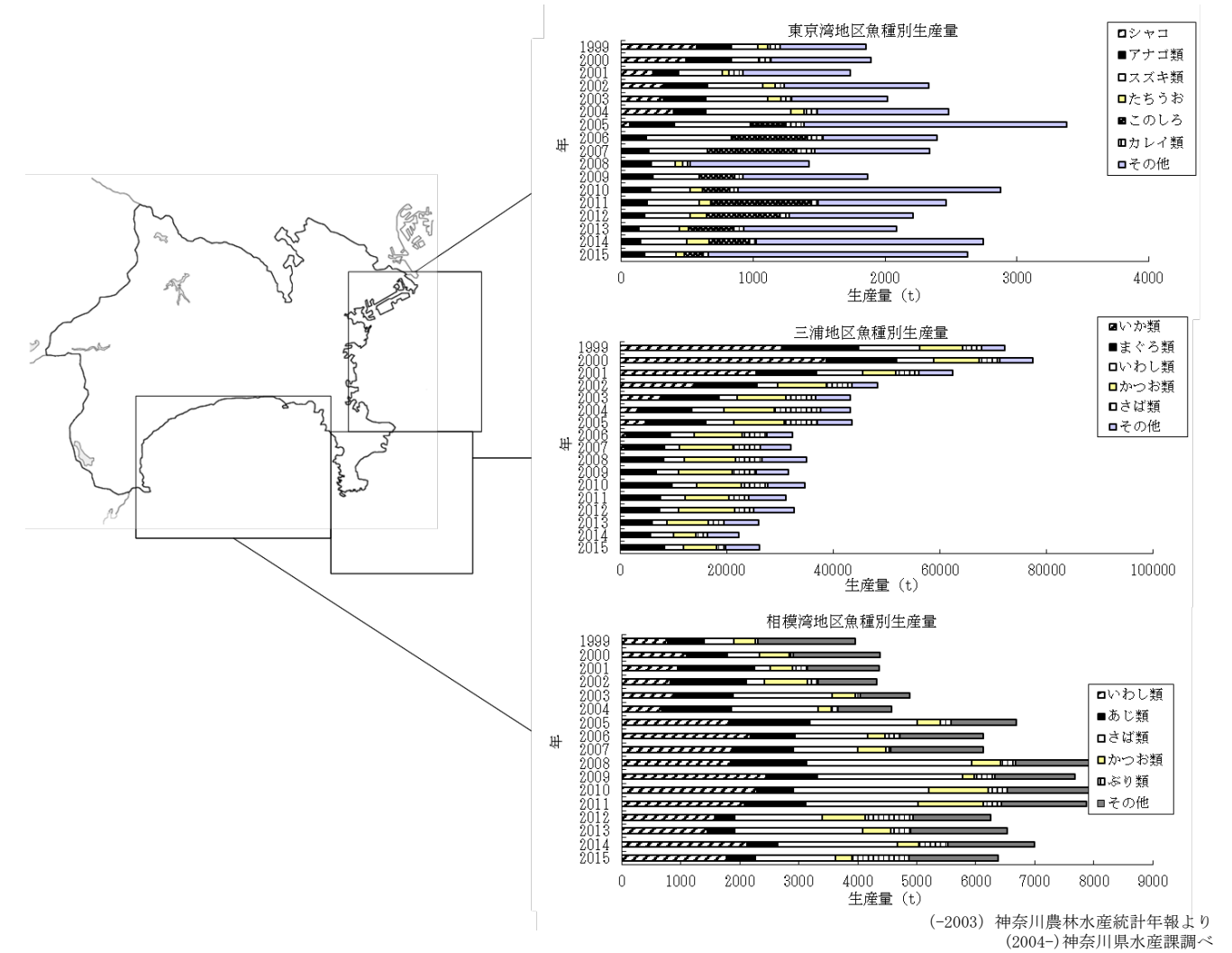
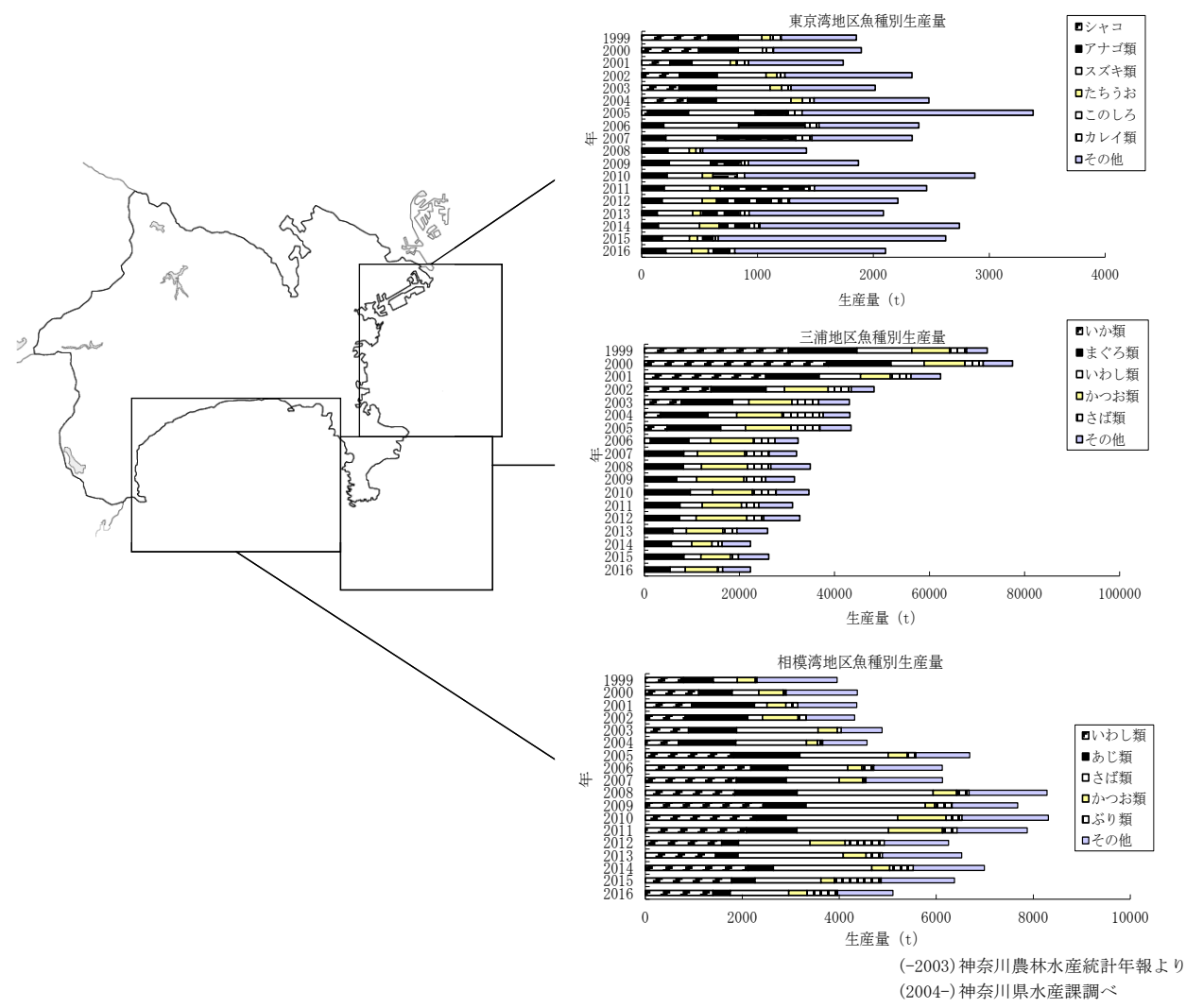


図2：地区別魚種別漁業生産量の推移（1999～2016）  
 （※三浦地区の生産量は遠洋・沖合漁業生産量を多く含む）

- 2 (略)
- 3 (略)

第2 海洋生物資源ごとの動向及び管理の方向

〔魚種別資源管理〕

1 サバ類

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

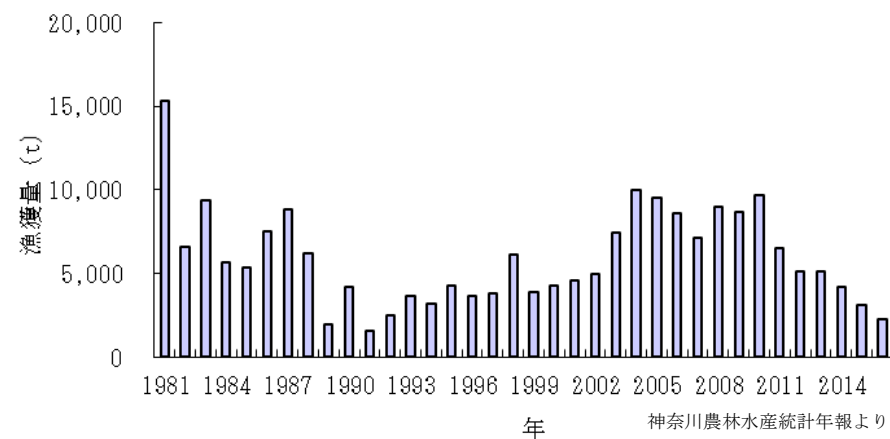


図3：サバ類漁獲量の推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

2 キンメダイ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

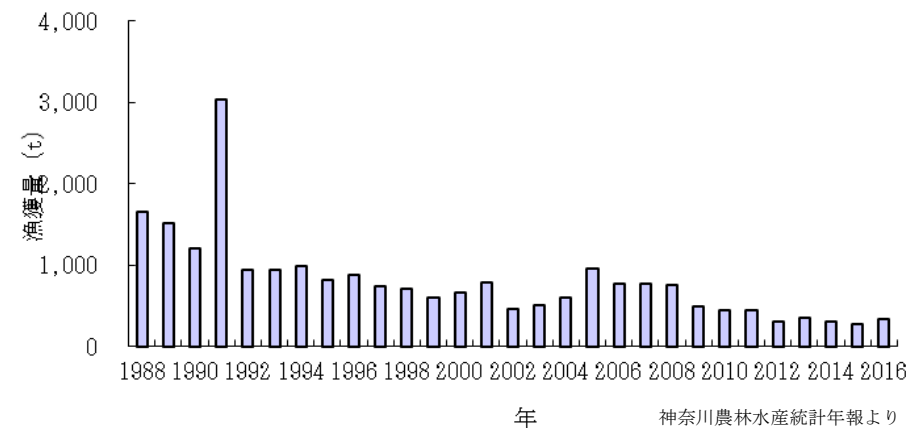


図2：地区別魚種別漁業生産量の推移（1999～2015）  
 （※三浦地区の生産量は遠洋・沖合漁業生産量を多く含む）

- 2 (略)
- 3 (略)

第2 海洋生物資源ごとの動向及び管理の方向

〔魚種別資源管理〕

1 サバ類

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

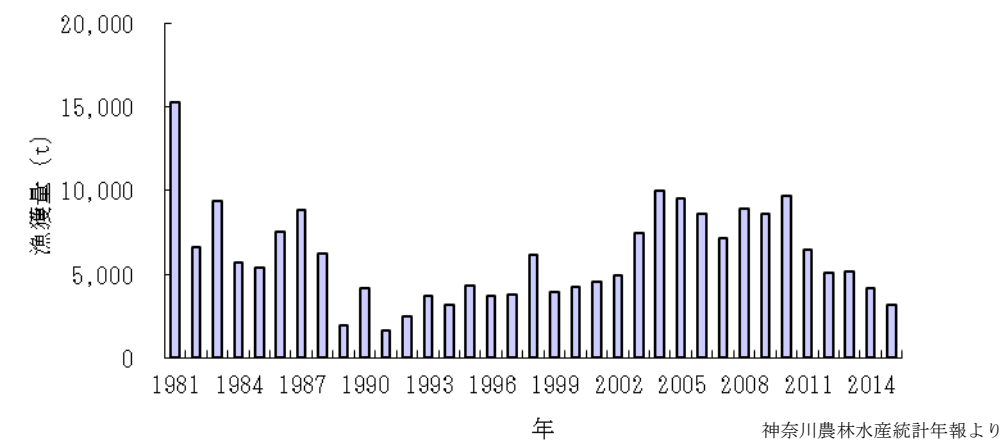


図3：サバ類漁獲量の推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

2 キンメダイ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

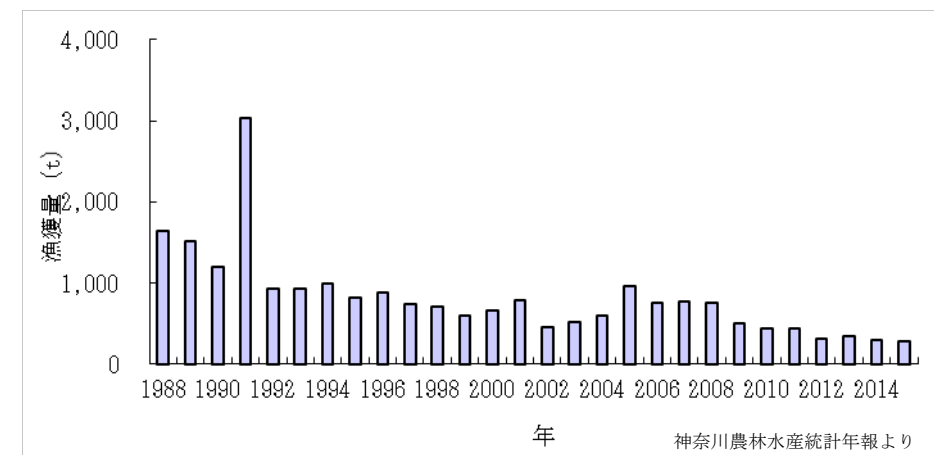


図4：キンメダイ漁獲量の推移（1988～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

3 ヒラメ

- (1) 資源及び漁獲の状況
- (略)

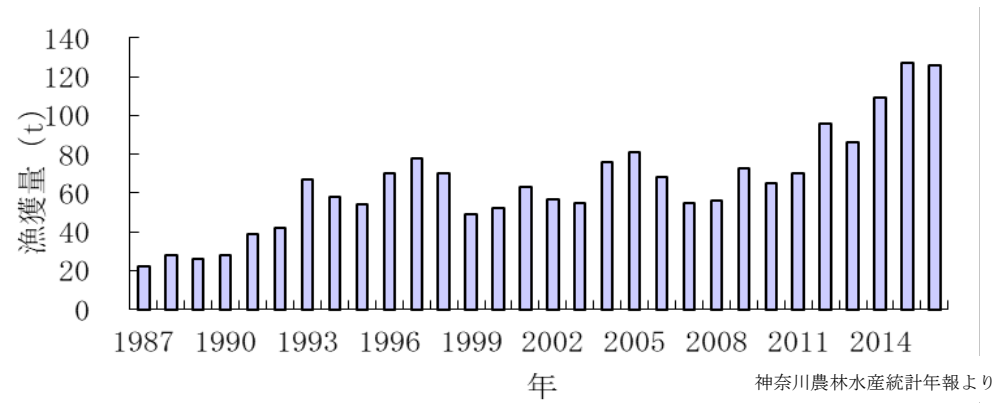


図5：ヒラメ漁獲量の推移（1987～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

4 マダイ

- (1) 資源及び漁獲の状況
- (略)

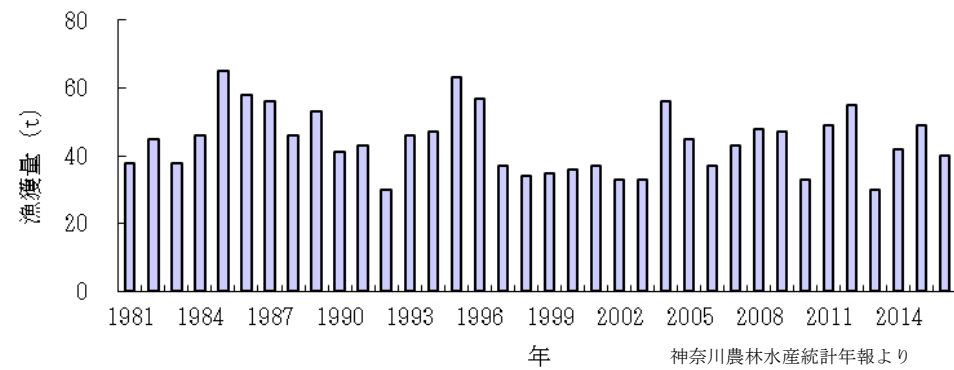


図6：マダイ漁獲量の推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

図4：キンメダイ漁獲量の推移（1988～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

3 ヒラメ

- (1) 資源及び漁獲の状況
- (略)

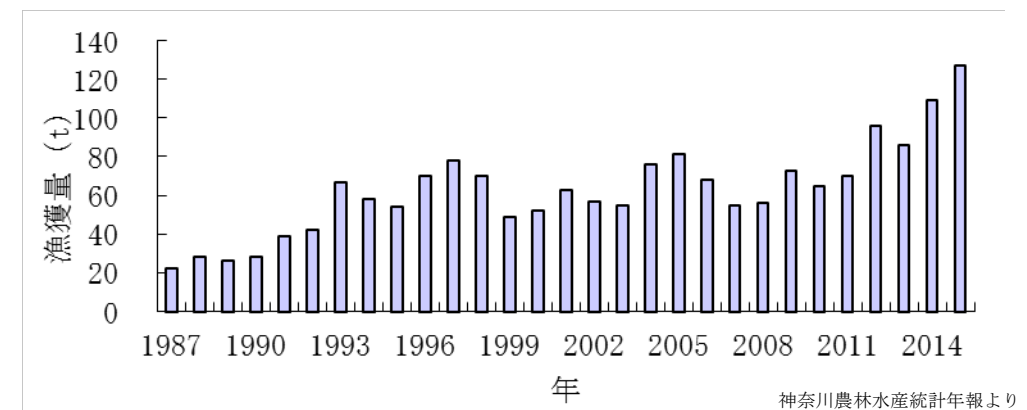


図5：ヒラメ漁獲量の推移（1987～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

4 マダイ

- (1) 資源及び漁獲の状況
- (略)

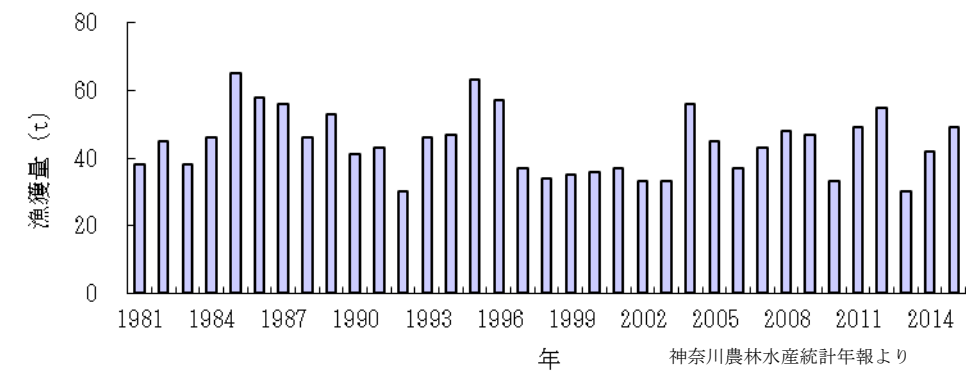


図6：マダイ漁獲量の推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

5 マコガレイ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

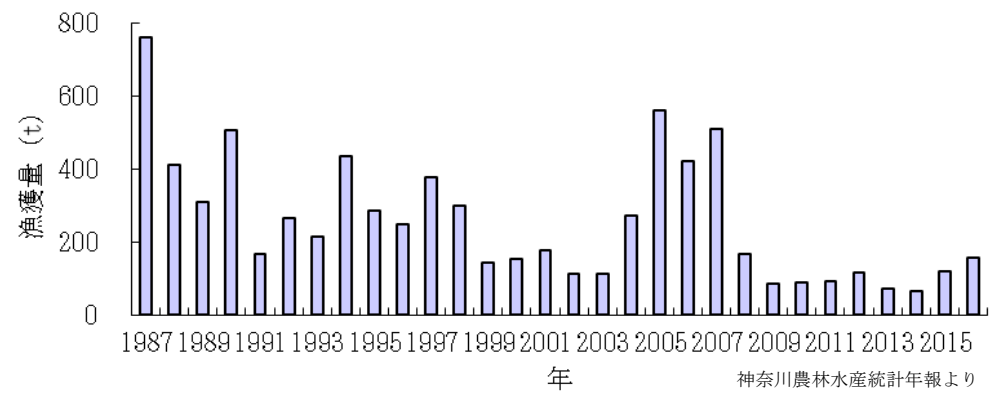


図7：カレイ類（マコガレイ含む）の漁獲量推移（1987～2016）

(2) (略)

(3) (略)

6 アナゴ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

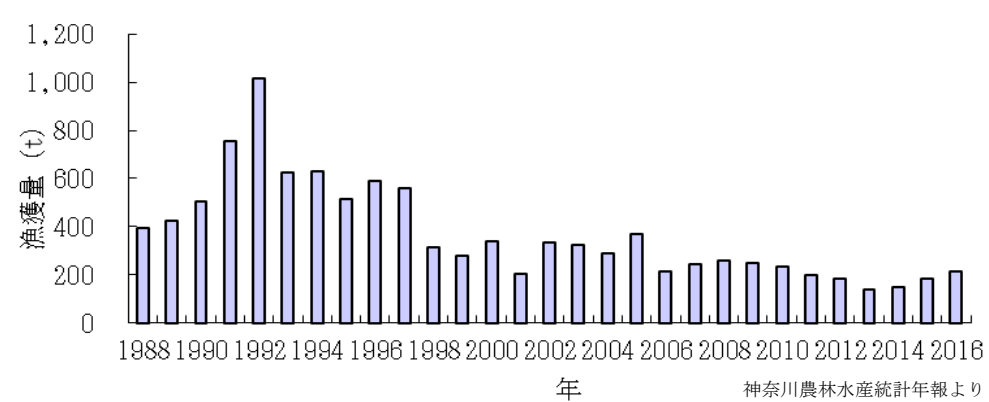


図8：アナゴ漁獲量の推移（1988～2016）

(2) (略)

(3) (略)

7 シラス

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

5 マコガレイ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

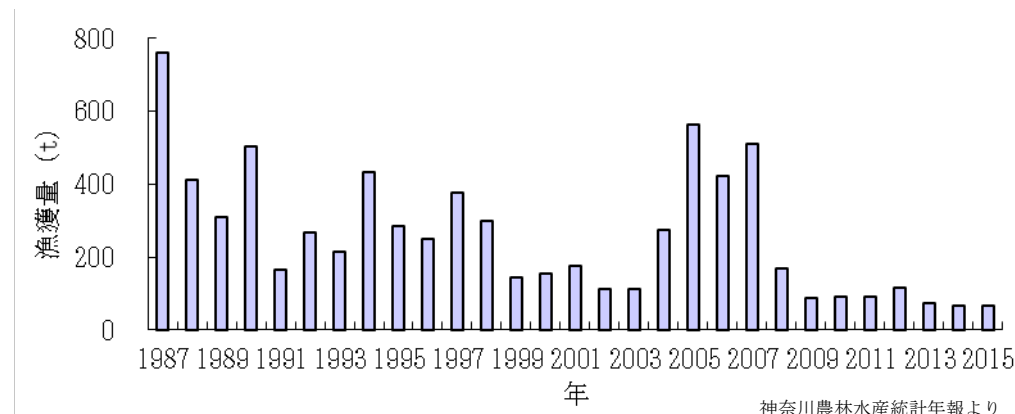


図7：カレイ類（マコガレイ含む）の漁獲量推移（1987～2015）

(2) (略)

(3) (略)

6 アナゴ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

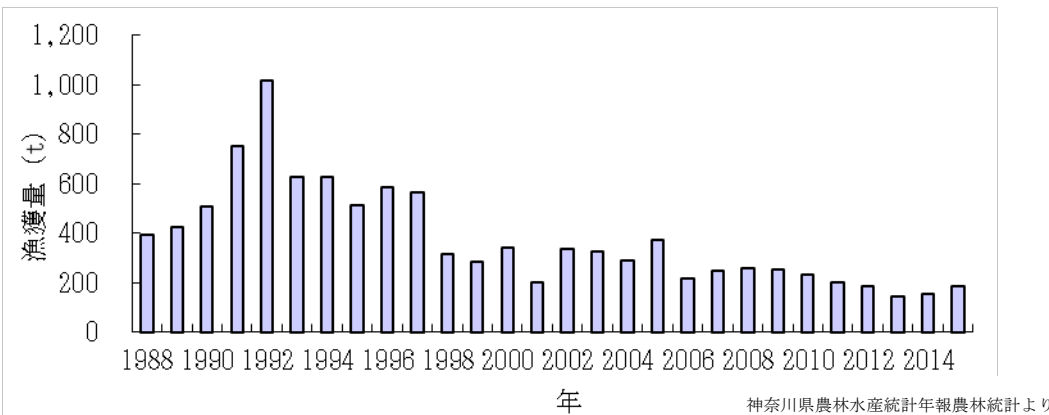


図8：アナゴ漁獲量の推移（1988～2015）

(2) (略)

(3) (略)

7 シラス

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

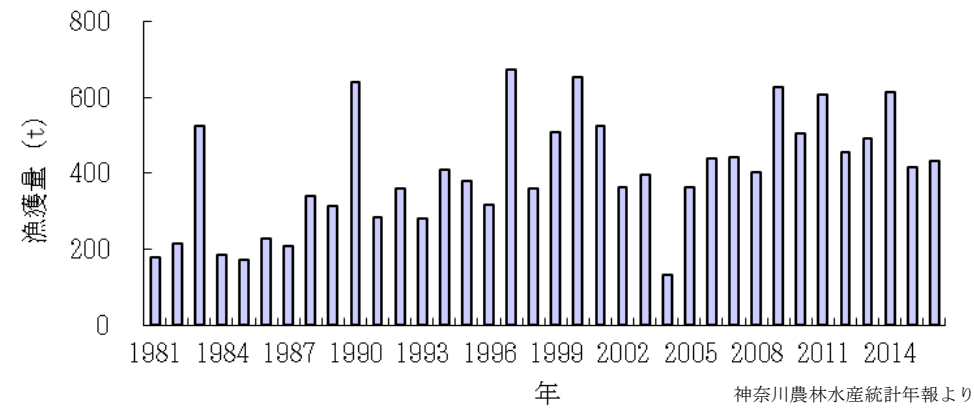


図9：シラス漁獲量の推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

## 8 アワビ

### (1) 資源及び漁獲の状況

本県における漁獲量は戦前100トン以上であったが、戦後になり一時漁獲量が減少したため、1968年から人工種苗放流が行われるようになった。その効果により1975年以降は一時60トン前後であったが、1985年以降、減少傾向が続いた。2000年以降一時回復が見られたが、近年再び減少傾向となり2016年には10トンを下回った。（図10）。また、漁獲量に占める放流貝の割合が非常に高く、近年は9割以上となっているが、原因の一つとして天然貝の親貝密度が低くなったことが挙げられるため、放流貝のみに頼るのではなく、稚貝及び親貝を保護し天然貝による再生産を促す対策も行う必要がある。

#### ○ 主な漁業種類

アワビ漁業（みづき漁業、裸もぐり漁業、潜水器漁業）

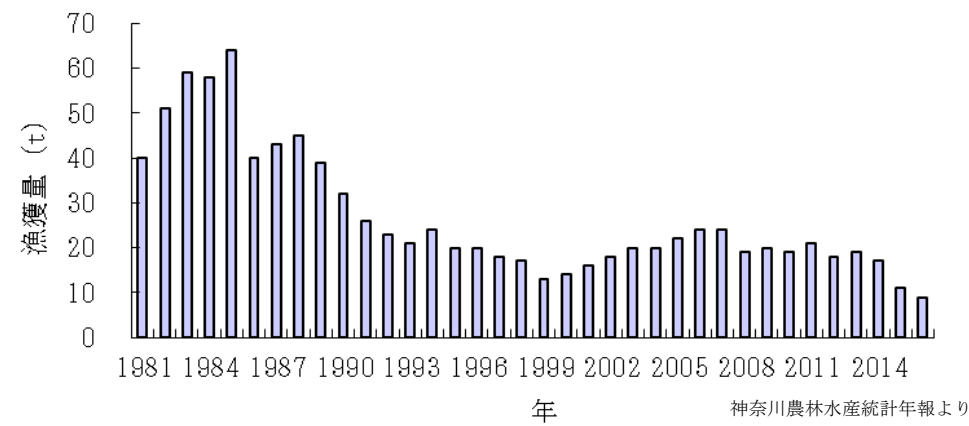


図10：アワビ漁獲量の推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

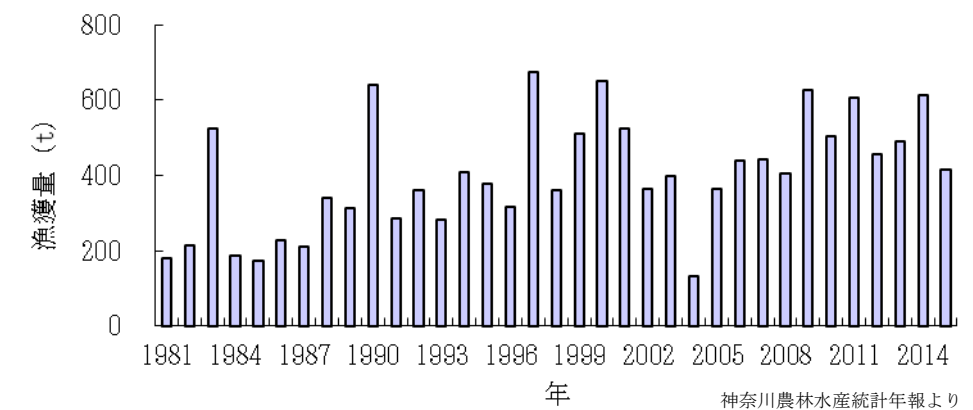


図9：シラス漁獲量の推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

## 8 アワビ

### (1) 資源及び漁獲の状況

本県における漁獲量は戦前100トン以上であったが、戦後になり一時漁獲量が減少したため、1968年から人工種苗放流が行われるようになった。その効果により1975年以降は一時60トンを超えた時期が続いたが、その後減少傾向となり1991年以降は30トンに届かず低調である（図10）。また、漁獲量に占める放流貝の割合が非常に高く、近年は9割以上となっているが、原因の一つとして天然貝の親貝密度が低くなったことが挙げられるため、放流貝のみに頼るのではなく、稚貝及び親貝を保護し天然貝による再生産を促す対策も行う必要がある。

#### ○ 主な漁業種類

アワビ漁業（みづき漁業、裸もぐり漁業、潜水器漁業）

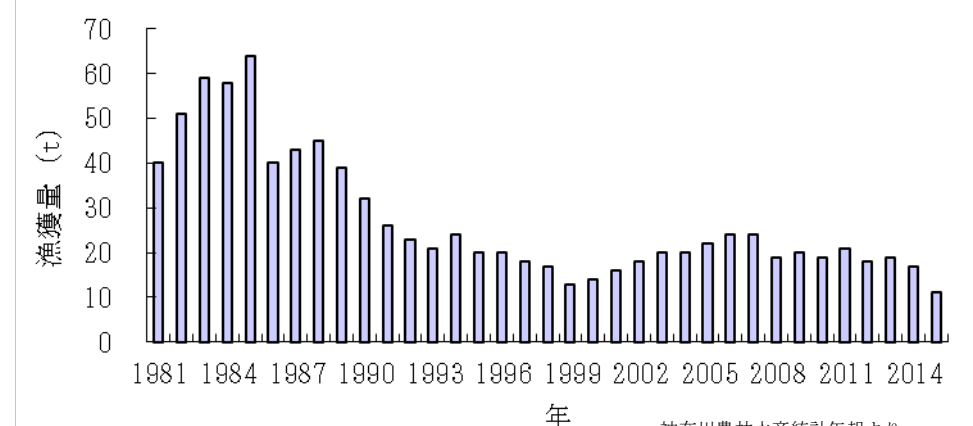


図10：アワビ漁獲量の推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

9 スルメイカ

(1) 資源及び漁獲の状況  
(略)

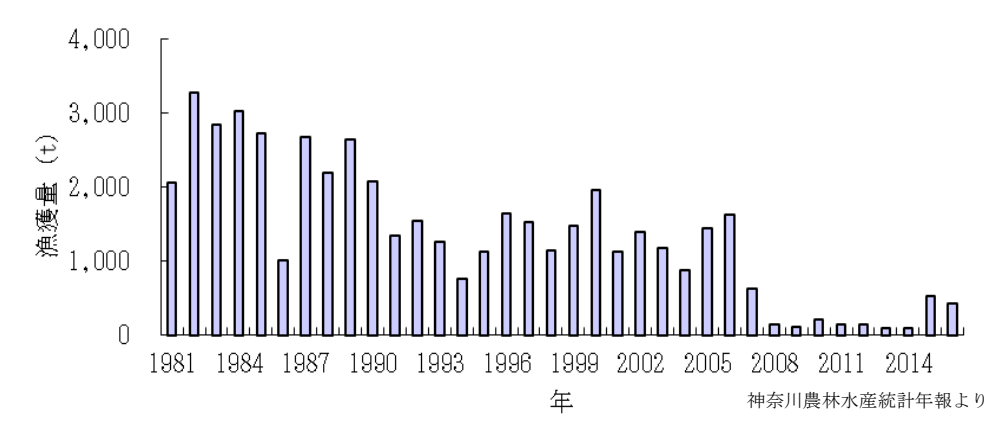


図11：スルメイカ漁獲量の推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

10 シャコ

(1) 資源及び漁獲の状況  
(略)

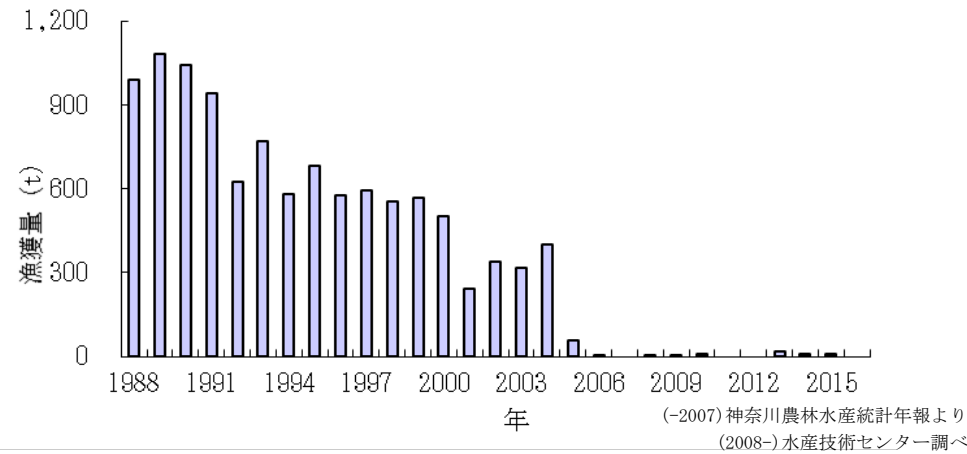


図12：シャコ漁獲量の推移（1988～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

11 ナマコ

(1) 資源及び漁獲の状況

ナマコは1990年代前半までは30トン以下の漁獲量であったが、1990年代後半からは増加傾向で、

9 スルメイカ

(1) 資源及び漁獲の状況  
(略)

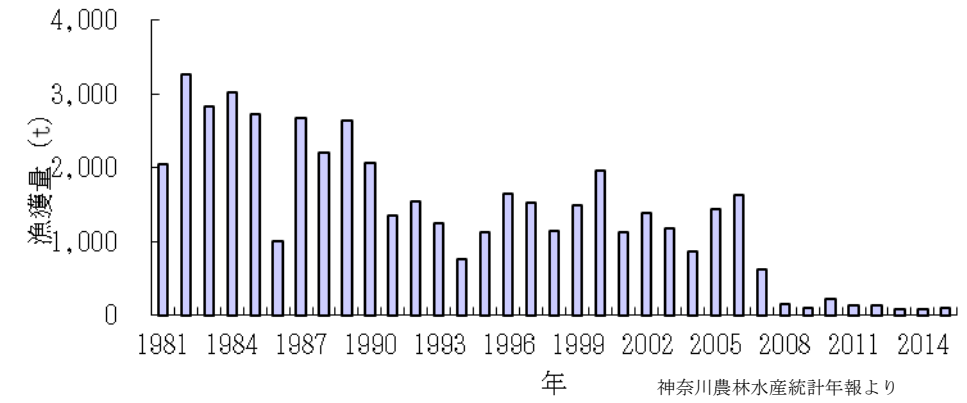


図11：スルメイカ漁獲量の推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

10 シャコ

(1) 資源及び漁獲の状況  
(略)

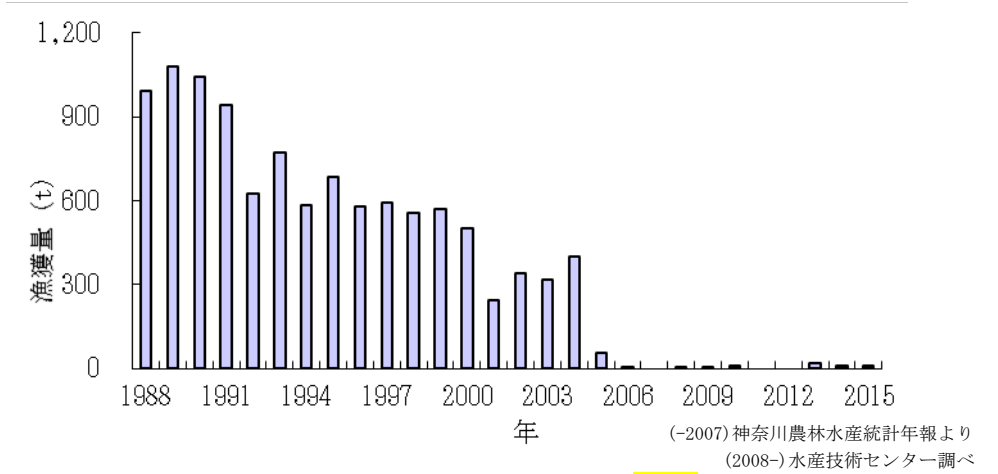


図12：シャコ漁獲量の推移（1988～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

11 ナマコ

(1) 資源及び漁獲の状況

ナマコは1990年代前半までは30トン以下の漁獲量であったが、1990年代後半からは増加傾向で、



2004年以降は特に著しく急増した。しかし、2011年以降は再び減少した(図13)。漁獲量の急激な増加は資源に与える影響も大きいため、今後は資源の動向に注意しつつ管理を行っていく必要がある。

○ 主な漁業種類

底びき網漁業、ナマコ漁業(裸もぐり漁業、潜水器漁業)

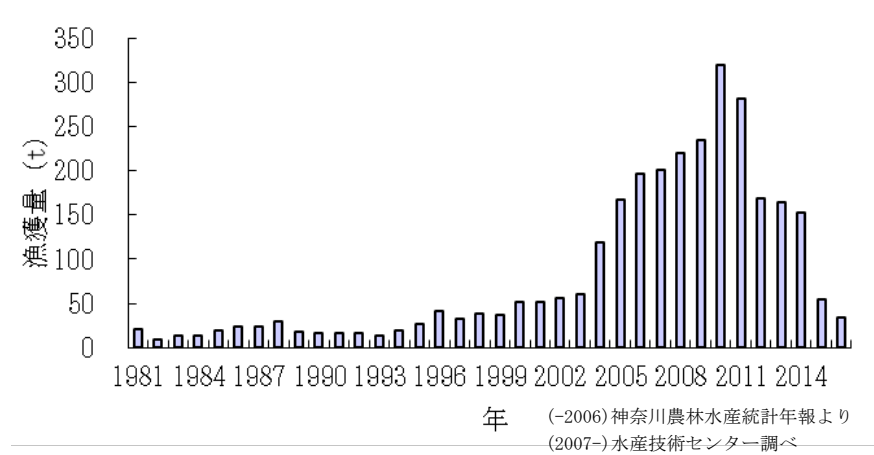


図13：ナマコの漁獲量推移 (1981～2016)

(2) (略)

(3) 資源管理措置

ナマコ資源を増大させるため、自主的に次の取組を重点的に行う必要がある。

○ 潜水器漁業、裸潜り漁業

- ・ 休漁日の設定
- ・ 漁獲量規制 (漁業者ごとの漁獲量の上限設定)

○ 固定式刺網漁業

- ・ 休漁日の設定
- ・ 漁獲量規制 (漁業者ごとの漁獲量の上限設定)

また、これまでに各地区において実施している漁獲物規制等の措置や資源状況に応じた取組についても引き続き取り組み、資源の増大を図る。

○ 小型機船底びき網漁業

小型機船底びき網漁業については、魚種としての管理が困難であるため、後述の漁業種類毎に管理を行うこととする。(〔漁業種類別資源管理〕2 小型機船底びき網漁業を参照のこと)

12 イセエビ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

2004年以降は特に著しく急増している(図13)。しかし、漁獲量の急激な増加は資源に与える影響も大きいため、今後は資源の動向に注意しつつ管理を行っていく必要がある。

○ 主な漁業種類

底びき網漁業、ナマコ漁業(裸もぐり漁業、潜水器漁業)

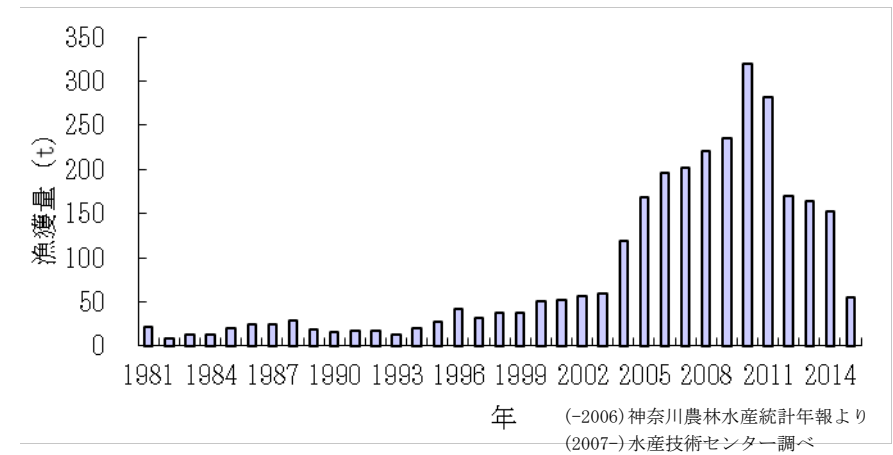


図13：ナマコの漁獲量推移 (1981～2015)

(2) (略)

(3) 資源管理措置

○ 潜水器漁業、裸潜り漁業

ナマコ資源を増大させるため、自主的に次の取組を重点的に行う必要がある。

- ・ 漁獲量規制 (漁業者ごとの漁獲量の上限設定)

また、これまでに各地区において実施している漁獲物規制等の措置や資源状況に応じた取組についても引き続き取り組み、資源の増大を図る必要がある。

(新規)

○ 小型機船底びき網漁業

小型機船底びき網漁業については、魚種としての管理が困難であるため、後述の漁業種類毎に管理を行うこととする。(〔漁業種類別資源管理〕2 小型機船底びき網漁業を参照のこと)

12 イセエビ

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

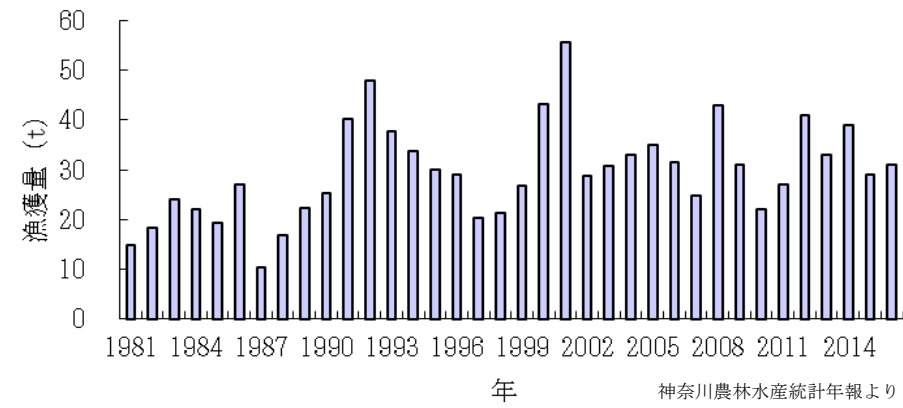


図14：イセエビの漁獲量推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

### 1.3 マダコ

#### (1) 資源及び漁獲の状況

マダコを主とするタコ類の漁獲量は約100トンから500トン台で大きく変動しているが、2008-2016年では約140から200トン台で推移している。主に共同漁業権に基づくたこつぼ漁業で漁獲されている。

- 主な漁業種類
- たこつぼ漁業

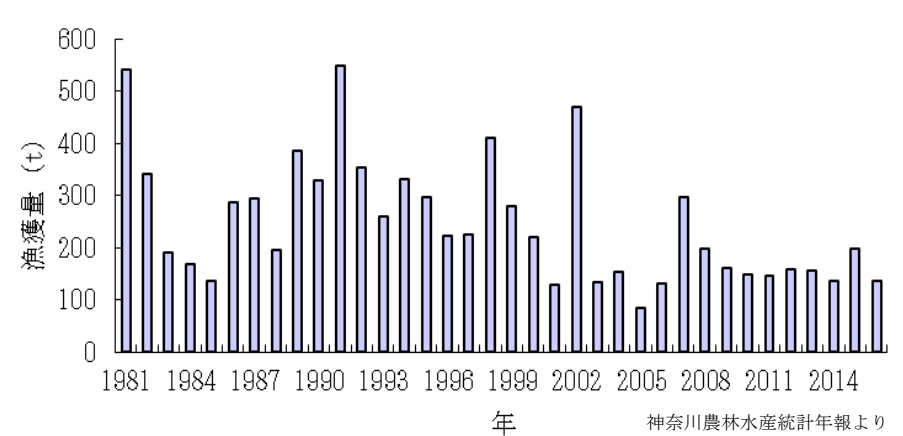


図15：タコ類の漁獲量推移（1981～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

### 1.4 トラフグ

#### (1) 資源及び漁獲の状況

(略)

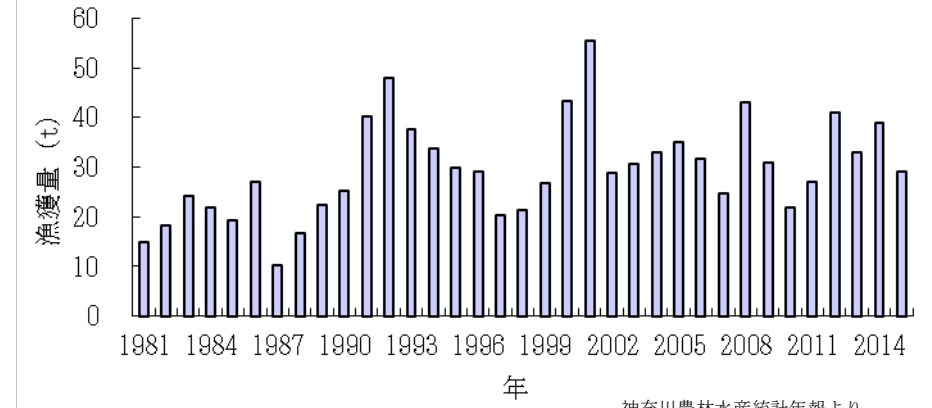


図14：イセエビの漁獲量推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

### 1.3 マダコ

#### (1) 資源及び漁獲の状況

マダコを主とするタコ類の漁獲量は約100トンから500トン台で大きく変動しているが、2008-2011年では約150から200トン台で推移している。主に共同漁業権に基づくたこつぼ漁業で漁獲されている。

- 主な漁業種類
- たこつぼ漁業

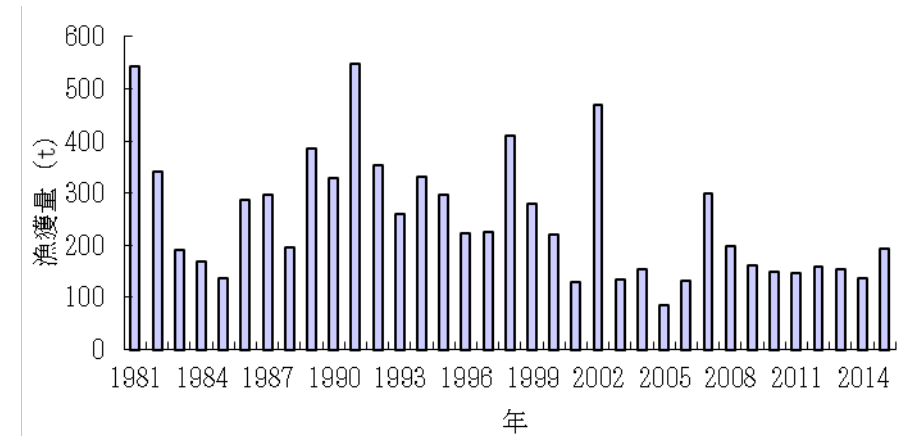


図15：タコ類の漁獲量推移（1981～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

### 1.4 トラフグ

#### (1) 資源及び漁獲の状況

(略)

○ 主な漁業種類

延縄漁業、定置網漁業、小型機船底びき網漁業

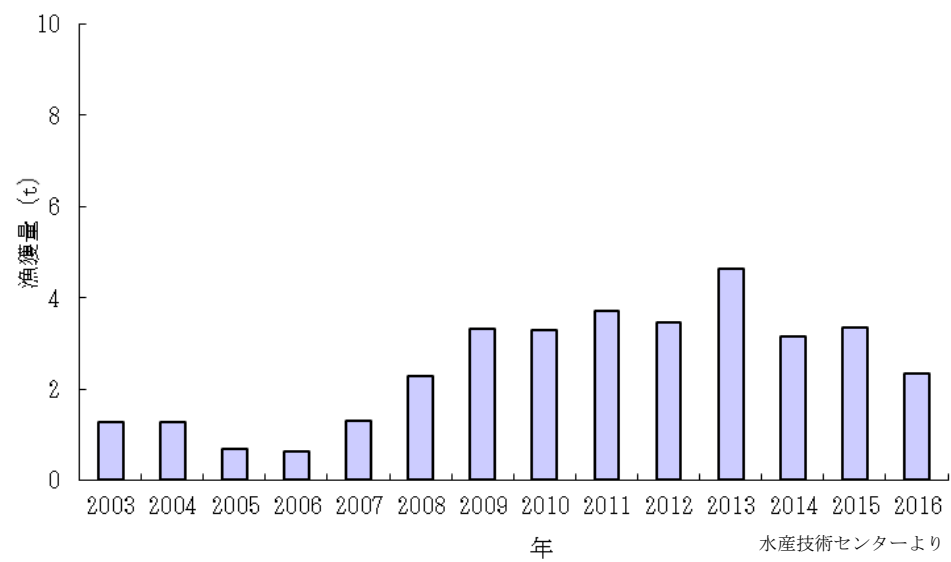


図16：トラフグ漁獲量の推移 (2003～2016)

(2) (略)

(3) (略)

### 15 イワシ類

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

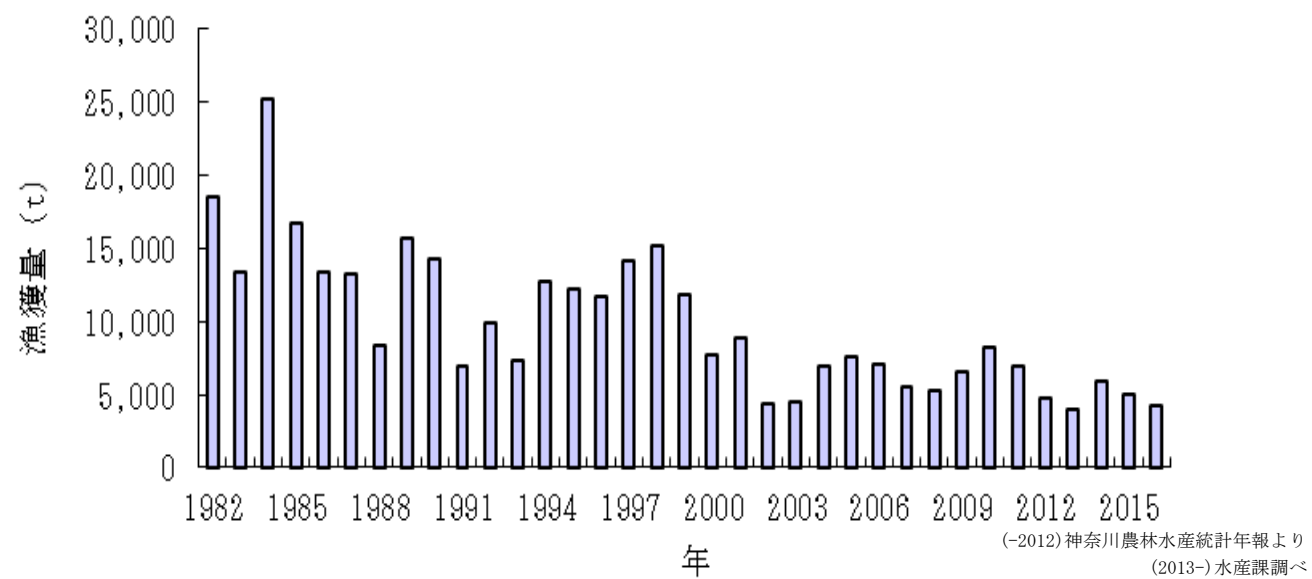


図17：イワシ類の漁獲量の推移 (1982～2016)

(2) (略)

○ 主な漁業種類

延縄漁業、定置網漁業、小型機船底びき網漁業

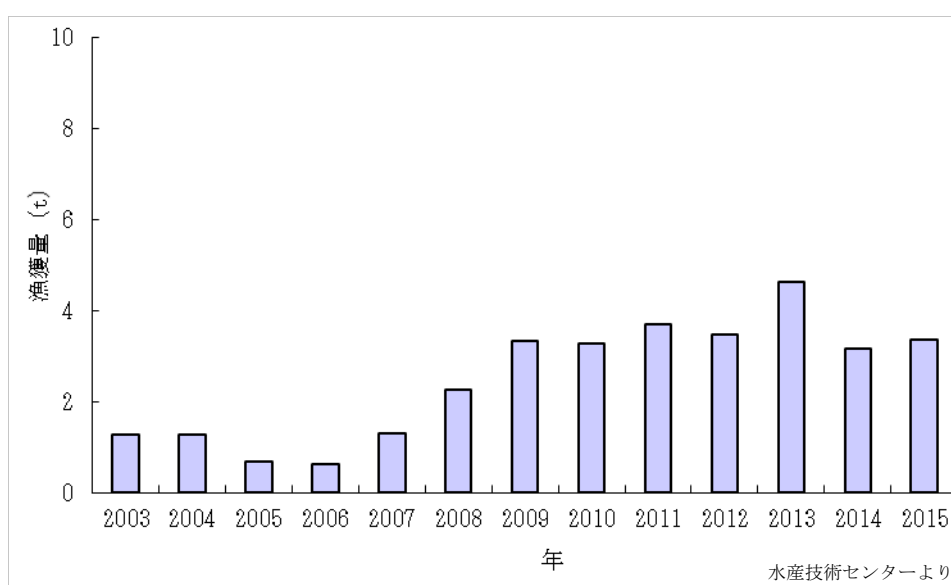


図16：トラフグ漁獲量の推移 (2003～2015)

(2) (略)

(3) (略)

### 15 イワシ類

(1) 資源及び漁獲の状況

(略)

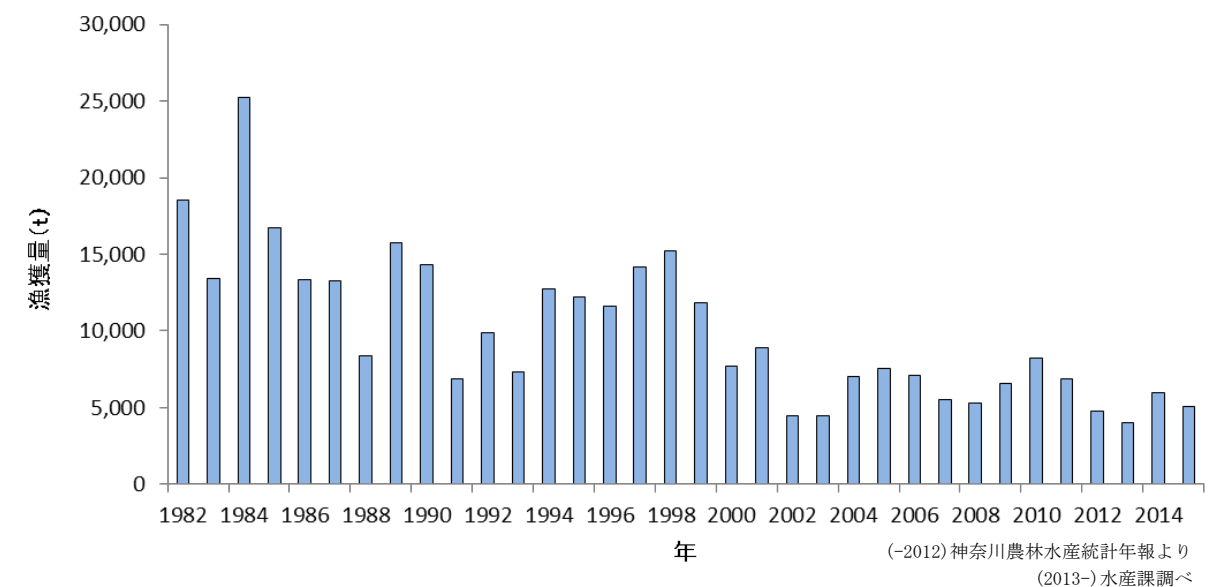


図17：イワシ類の漁獲量の推移 (1982～2015)

(2) (略)

(3) (略)

## 16 クロマグロ

### (1) 資源及び漁獲の状況

国は、太平洋クロマグロの資源回復を図るため、WCPFCの決定を踏まえ2010年から管理強化に取り組んでおり、2015年1月から30kg未満の小型魚について2002～2004年までの年平均漁獲実績から半減するように管理する措置を実施している。県は、2018年7月から「海洋生物資源の保存及び管理に関する法律」に基づく管理を実施することとなっている。

太平洋のクロマグロの漁獲状況は、1988年と1890年には歴史的最低値1万トン进行割り込んだが、90年代、2000年代には2.5万トンを超える年もあり回復した。2013年以降、再び減少に転じたが、2016年には4.4万トンと資源管理措置の効果もあり近年は微増傾向にある。

本県の漁獲状況は、0～1歳の小型魚が中心であり、図18のとおり太平洋クロマグロの資源状況だけでなく海況の影響も強く年変動が大きく2012年の138トン进行最後に低迷している。

#### ○ 主な漁業種類

一本釣り漁業、はえ縄漁業、定置網漁業

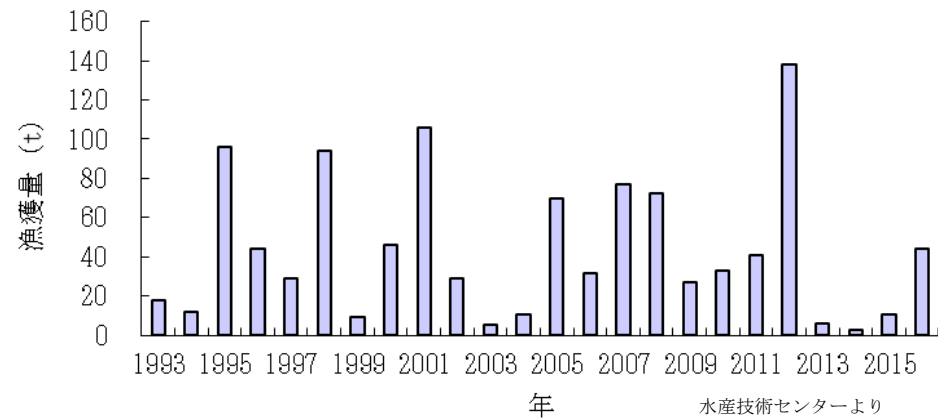


図18：クロマグロの漁獲量の推移 (1993～2016)

(2) (略)

(3) (略)

## 17 タチウオ

### (1) 資源及び漁獲の状況

本県において、タチウオは2007年以降、東京湾の小型機船底びき網漁業の重要資源として重要度が増してきた。1993年には1000トン前後あった漁獲は1990年代後半から減少し続け、2000年代以降は200トン前後で推移している。(図19)

#### ○ 主な漁業種類

小型機船底びき網漁業、はえ縄漁業、定置網漁業

(3) (略)

## 16 クロマグロ

### (1) 資源及び漁獲の状況

国は、太平洋クロマグロの資源回復を図るため、WCPFCの決定を踏まえ2010年から管理強化に取り組んでおり、2015年1月から30kg未満の小型魚について2002～2004年までの年平均漁獲実績から半減するように管理する措置を実施している。県は、2018年7月から「海洋生物資源の保存及び管理に関する法律」に基づく管理を実施することとなっている。

太平洋のクロマグロの漁獲状況は、1988年と1890年には歴史的最低値1万トン进行割り込んだが、90年代、2000年代には2.5万トンを超える年もあり回復した。その後減少に転じ2013年、2015年に1.1万トンとなったが資源管理措置の効果もあり近年は微増傾向にある。

本県の漁獲状況は、0～1歳の小型魚が中心であり、図18のとおり太平洋クロマグロの資源状況だけでなく海況の影響も強く年変動が大きく2012年の138トン进行最後に低迷している。

#### ○ 主な漁業種類

一本釣り漁業、はえ縄漁業、定置網漁業

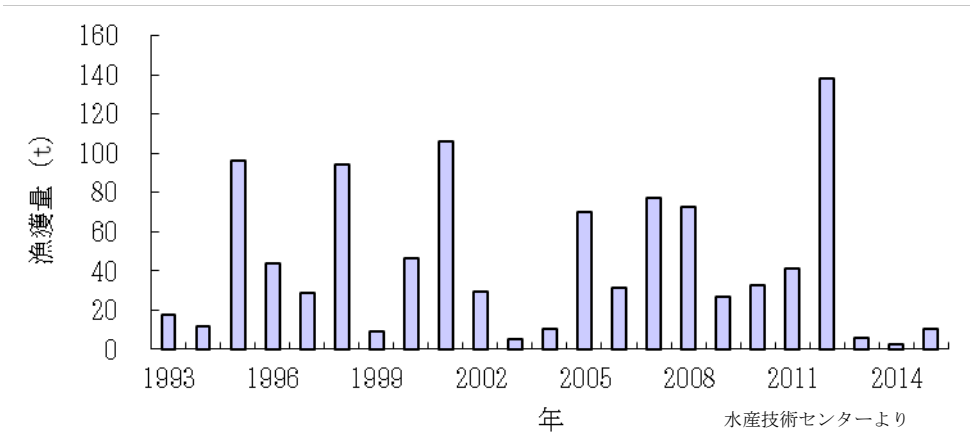


図18：クロマグロの漁獲量の推移 (1993～2015)

(2) (略)

(3) (略)

(新規)

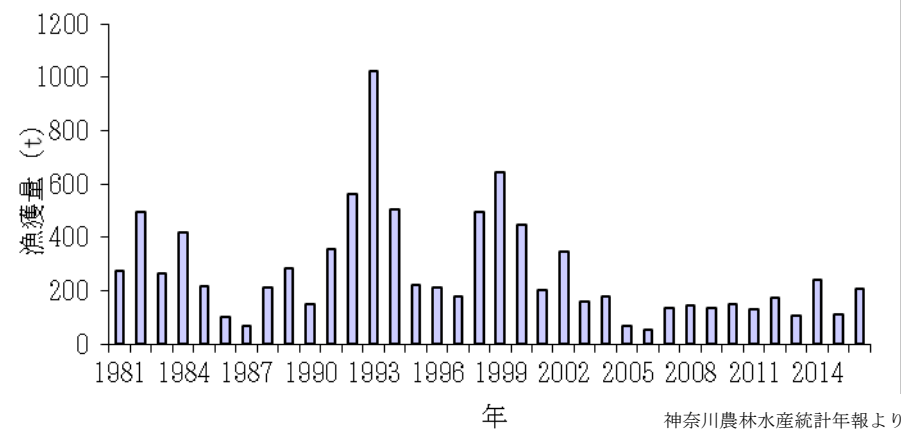


図19：タチウオの漁獲量の推移 (1981～2016)

**(2) 資源管理目標**

タチウオ資源については漁獲量が急増していることから資源状態に配慮しながら漁獲量や漁獲努力量の制限を定め、現状の資源状態を悪化させないように管理を行うことを目標とする。

**(3) 資源管理措置**

○ はえ縄漁業

タチウオ資源を現状レベルで維持させるため、自主的に次の取組を重点的に行う必要がある。

- ・ 休漁期間の設定
- ・ 操業時間規制
- ・ 漁獲物規制 (体長制限)

○ 定置網漁業

定置網漁業については、魚種としての管理が困難であるため、後述の漁業種類毎に管理を行うこととする。(〔漁業種類別資源管理〕 1. 定置網漁業を参照のこと)

○ 小型機船底びき網漁業

小型機船底びき網漁業については、魚種としての管理が困難であるため、後述の漁業種類毎に管理を行うこととする。(〔漁業種類別資源管理〕 2. 小型機船底びき網漁業を参照のこと)

〔漁業種類別資源管理〕

1 定置網漁業

(1) 資源及び漁獲の状況

定置網漁業で漁獲される主な魚種は、マイワシ、カタクチイワシ、マサバ、ゴマサバ、マアジ、ヒラメ、カマス、ブリ等である。県内定置網の設置状況としては、三浦半島から真鶴半島にかけて相模湾の沿岸全域に大型定置網(漁業権に基づく漁業)と小型定置網(共同漁業権・知事許可漁業)が設置されている。漁獲量の推移は1988年から1998年までは年間10,000から17,000トン前後で、1999年から2002年までは年間7,000から8,000トン前後でやや減少したが、2003年以降は10,000

〔漁業種類別資源管理〕

1 定置網漁業

(1) 資源及び漁獲の状況

定置網漁業で漁獲される主な魚種は、マイワシ、カタクチイワシ、マサバ、ゴマサバ、マアジ、ヒラメ、カマス、ブリ等である。県内定置網の設置状況としては、三浦半島から真鶴半島にかけて相模湾の沿岸全域に大型定置網(漁業権に基づく漁業)と小型定置網(共同漁業権・知事許可漁

から15,000トンの間で推移してきたが、2016年には10,000トンを下回った(図20)。

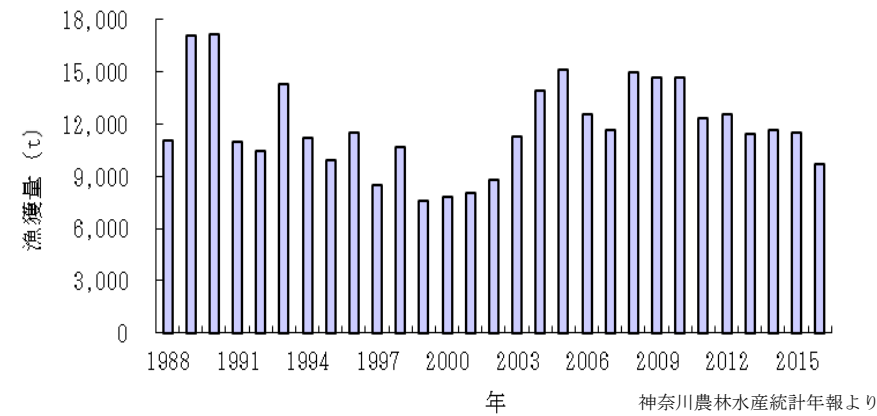


図20：定置網漁業の漁獲量推移（1988～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

## 2 小型機船底びき網漁業

### (1) 資源及び漁獲の状況

小型機船底びき網漁業は、東京内湾における県の基幹漁業であるが、2000年以前は減少傾向であるものの、漁獲量は年間1,000トンから2,000トンであった。しかし、2001年以降は年間漁獲量が1,000トンに届かず、2006年に至っては400トンにまで減少した(図21)。特にシャコの漁獲量の減少は著しく、全盛期は1,000トン前後あった漁獲が2005年以降は100トン以下に落ち込んでいる(図12)。このため、2007年に東京内湾海域小型機船底びき網漁業包括的資源回復計画を策定し、資源の回復に取り組んでいる。

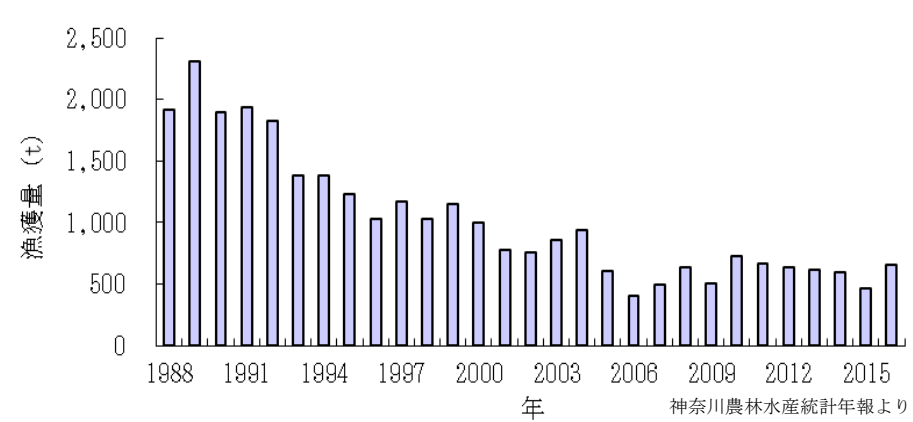


図21：小型機船底びき網漁業の漁獲量推移（1988～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

## 3 小型まき網漁業

### (1) 資源及び漁獲の状況

業) が設置されている。漁獲量の推移は1988年から1998年までは年間10,000から17,000トン前後で、1999年から2002年までは年間7,000から8,000トン前後でやや減少したが、2003年以降は10,000から15,000トンの間で推移している(図18)。

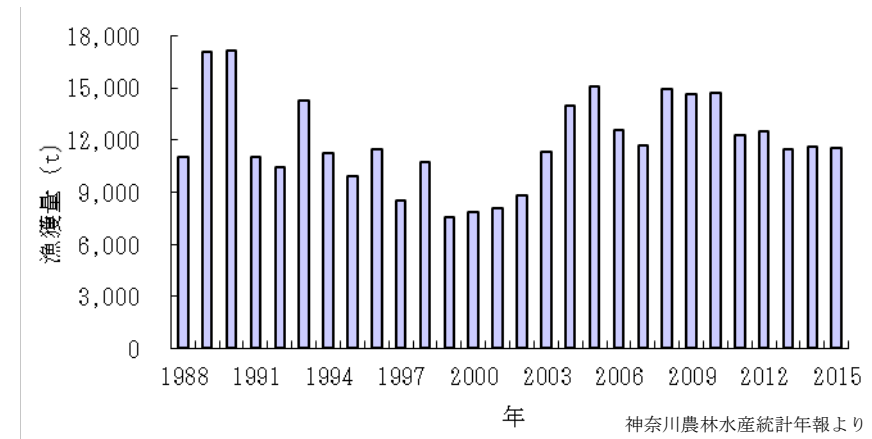


図19：定置網漁業の漁獲量推移（1988～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

## 2 小型機船底びき網漁業

### (1) 資源及び漁獲の状況

小型機船底びき網漁業は、東京内湾における県の基幹漁業であるが、2000年以前は減少傾向であるものの、漁獲量は年間1,000トンから2,000トンであった。しかし、2001年以降は年間漁獲量が1,000トンに届かず、2006年に至っては400トンにまで減少した(図19)。特にシャコの漁獲量の減少は著しく、全盛期は1,000トン前後あった漁獲が2005年以降は100トン以下に落ち込んでいる(図12)。このため、2007年に東京内湾海域小型機船底びき網漁業包括的資源回復計画を策定し、資源の回復に取り組んでいる。

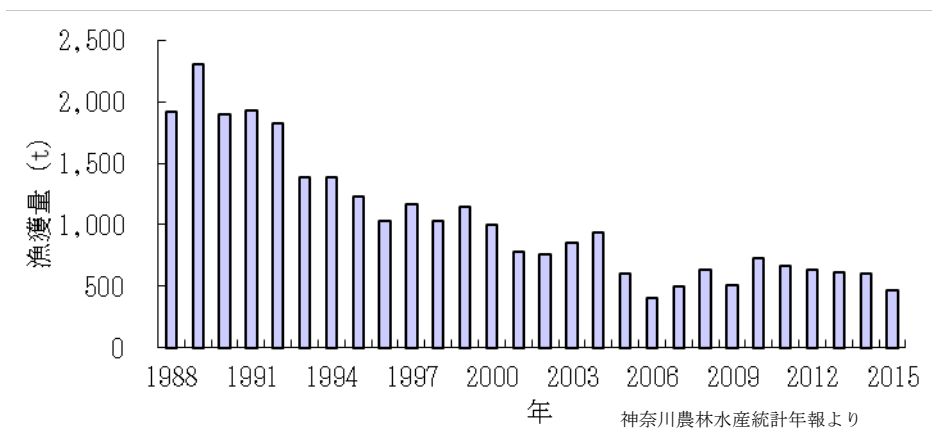


図20：小型機船底びき網漁業の漁獲量推移（1988～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

## 3 小型まき網漁業

本県のまき網漁業は、2010年及び2011年はイワシ類の豊漁によって漁獲量が増加したが、それ以外は1,500トンから2,500トンの間で推移したが、2016年には1,000トンを下回った（図22）。小型まき網漁業はコノシロ、スズキ及びカタクチイワシ（鮮魚及び活魚）の漁獲量が80%以上を占めている。

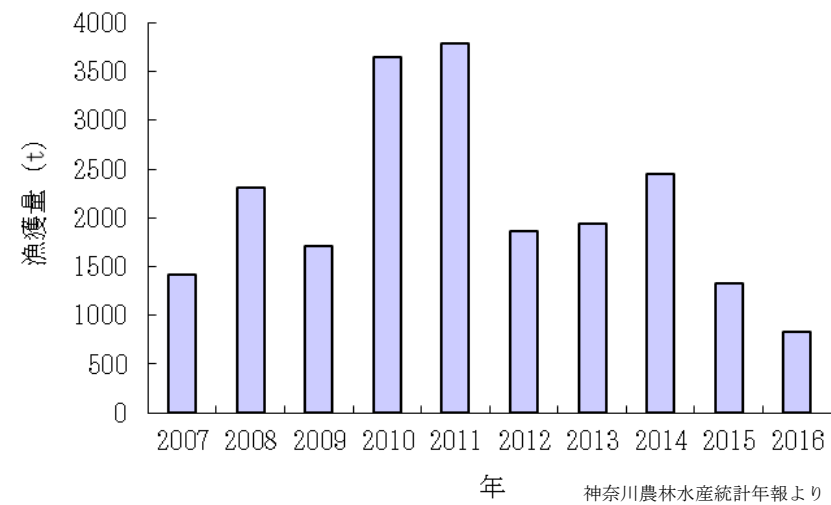


図22：中・小型まき網漁業の漁獲量推移（2007～2016）

- (2) (略)
- (3) (略)

第3 その他

- (1) (略)
- (2) (略)

(3) 評価検証作業

指針に従い作成された資源管理計画を都道府県が作成した指針に従い作成された資源管理計画に基づき計画（Plan）、実施、（Do）、評価（Check）、改善（Act）のPDCAサイクルを着実に実行することを通じて、漁業者や資源を取り巻く状況等に応じた適切な資源管理の推進を図る。

- ① 策定後4年を経過した次の年度に、各資源管理計画に基づく資源管理措置の実施により資源の維持・回復等の効果が見られるかどうか、その資源管理措置が適切かどうか等につき、評価・検証する。
- ② 評価・検証については、外部有識者（漁業や資源管理についての専門的知識を有する者など）が参加する資源管理協議会が実施する。
- ③ 指標は、対象魚種の資源量やCPUEの経年的な動向を基本とし、現時点で資源量やCPUEの把握が難しい魚種や漁業種類についても、漁獲努力量及び漁獲量などの経年的な変化を組み合わせた定量的な資源動向を把握できるような必要なデータ収集・蓄積などの体制整備に努めるものとする。
- ④ 評価・検証の結果を踏まえ、資源管理計画の目標、管理措置の内容等の見直し、改善を図るものとともに、資源管理措置を講ずる漁業

(1) 資源及び漁獲の状況

本県のまき網漁業は、2010年及び2011年はイワシ類の豊漁によって漁獲量が増加し、それ以外は1,500トンから2,500トンの間で推移している（図20）。小型まき網漁業はコノシロ、スズキ及びカタクチイワシ（鮮魚及び活魚）の漁獲量が80%以上を占めている。

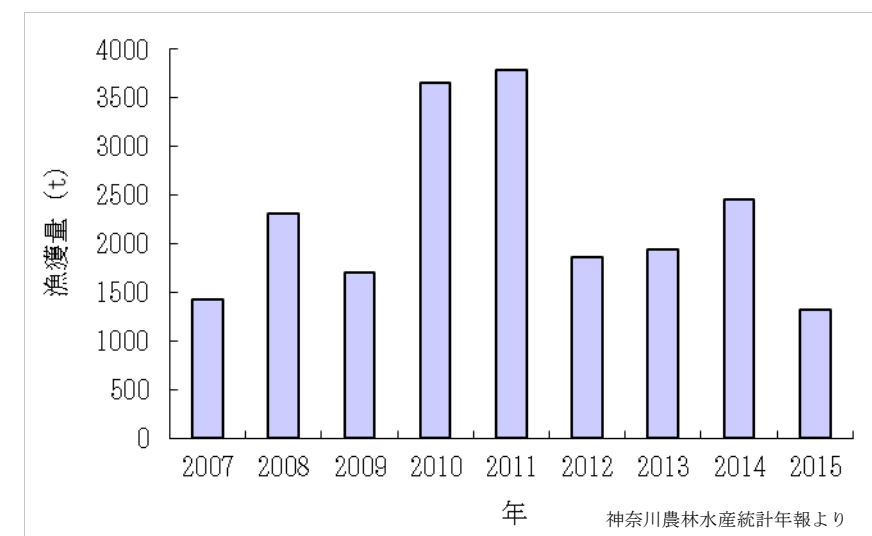


図21：中・小型まき網漁業の漁獲量推移（2007～2015）

- (2) (略)
- (3) (略)

第3 その他

- (1) (略)
- (2) (略)

(新規)

者及び関係者団体への周知徹底を図る。

(4) (略)

(3) (略)